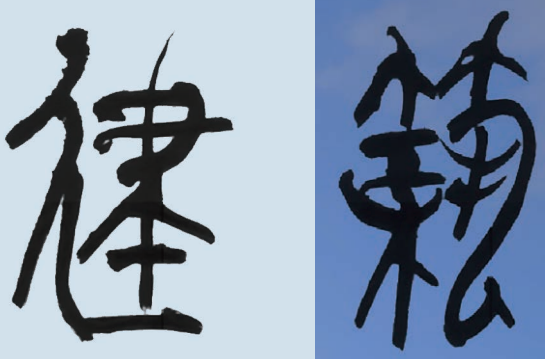
古代象形絵文字作家・竹本大亀氏による「建築」揮毫



第7回 京都建築賞 結果発表

京都建築賞は、京都府建築士会の創立60周年を記念して創設されました。京都の歴史的文脈を踏まえつつ創造性の高い建築作品を表彰し、その活動及び業績を広く社会に伝えることにより、京都及び建築の継承・発展に資することを目的とするものです。第4回からは、次代を担っていく建築士の支援を目的として、京都建築賞に特定のテーマを設定する新たな部門「藤井厚二賞」を創設しました。藤井厚二賞については10月号(予定)で紹介します。

主催 一般社団法人 京都府建築士会
後援 京都府・京都市・宇治市

最優秀賞

京都外国語大学 新4号館
設計者・小嶋一浩　赤松佳珠子（株式会社 シーラカンスアンドアソシエイツ）

優秀賞

Lattice-Pod 朝田善之助記念館
設計者・森田一弥（森田一弥建築設計事務所）

てらす峰夢
設計者・大垣優太（U設計室 1級建築士事務所）

奨励賞

RESIDENCE JO MIBUBANBA
設計者・竹内誠一郎　姜順英（竹内誠一郎建築研究所）

審査委員会
委員長　竹山　聖（京都大学 教授）
委　員　井上章一（国際日本文化研究センター 教授）
　　永山祐子（有限会社 永山祐子建築設計）

古代象形絵文字作家
竹本大亀（たけもとだいき） 氏　プロフィール

1952年、滋賀県大津市生まれ。高等学校にて芸術科目として書道を選択、ライフワークとして書アーティストへの道を歩む礎を高校生時代に築き、書一筋の人生を歩み、独自の世界を築いている。

漢字のルーツが絵文字であることに注目。現代の文字は絵・絵文字が記号化・符号化いわば文字化したもの、またそれは絵が抽象化したものとも言え、現代の文字を具象化することで絵文字ならではの表情や生命感を再現し、書道界に新境地を開き独自の世界を展開している。

甲骨文字や青銅器文字を用いて、世界平和や人類の幸福を神に祈願するという揮毫（きごう）活動を行っており、初回は1997年の阪神・淡路大震災後の復興を祈願して生田神社で行い、以後、青蓮院門跡・清水寺・八坂神社等で奉納祈願揮毫を行う。2012年以降は京都・松尾大社の正月行事として神に通じる古代神聖文字にて、この一年をこの文字のもと、ポジティブに歩むという1字を募集、奉納祈願揮毫を行っている。

2019年 京都建築賞 審査総評

審査委員長　竹山　聖

今回から審査員が一新され、私もあらたに審査に加わった。僭越ながら全体講評をしたためさせていただく。

審査はまず書類選考を経て現地視察へと進む、というプロセスをとるのだが、今回初めて丹後の峰山まで足を延ばすことになった。これほど遠方の視察は初めてだという。審査員一同、〈てらす峰夢〉の不思議な佇まいに惹かれたのだった。

現地視察は二日に亘り、初日に市内の候補作を周り、二日目が峰山往復。この二日目の、しかも帰路の車内で審査の幕は閉じた。車内討議であらかた意見は集約され、比較的スムーズに結論に至ってしまったのだ。

建築は基本的に空間的な価値を有するかどうか、が評価の一番の観点だ、というのが私の立場である。大袈裟な話になるが、パルテノンもハギアソフィアも、その当初の機能を全うした後に、やはり空間の佇まいが魅力的であったので、大切に残された。使い勝手の良いだけの建築が価値のある建築では、ない。とはいえ、いくら空間的価値があっても、敵視されれば破壊される。その価値が継承されていくかどうかは、それが認められ、愛されたかどうかにかかっている。使われ方の底に、愛があるか、そしてそれが継承されるか。少なくともその可能性をはらんでいるか。井上章一さん、永山祐子さん、というソフトな論客たちとの議論のなかで、私の思いはそうした観点の周りを回り続けていた。

〈てらす峰夢〉の建築空間的価値については、予想通り不思議な佇まいのさなかに宙づりにされている。その配置計画や周囲との関係は好ましいが、石、木、金属という一見不調和な素材を、しかもあえて不揃いな形に誂えて、ただ並列するという大胆な構成は、少なくともこれまでの建築美学にはなじまない。ヴェンチューリほどの戦略性があるわけでもない。ただそこにあるのは愛、だった。運営の長、スタッフ、そしてこうした施設の設計経験がない、という新鮮な感覚を買われて選抜された設計者のこの建築に注いだ愛が、そして地域に根ざした気概が、この建築のもつあたたかみが受け継がれるであろう未来の時間への期待を十分に信じさせるところがあって、受賞に値する、と結論が出た。

建築とそこに集う人々の豊かな交流の風景（建築と人との交流、と読んでいただいて結構である）に打たれたもう一つの作品が〈京都外国語大学新4号館〉であって、この建築に関しては、ともすれば淀みがちな学校建築における空間の流れが見事に制御され、演出され、そしておそらくはその演出を超えた使い方がなされていて、文字通り空間が活性化されていた。異物を排除して空間の潔癖を守るという思想とは対極の、他者を受け入れ共存させる装置としての建築がそこにあった。空間的価値の観点からも、愛という観点からも、そしてなによりチャレンジングな構想という設計に携わるものにとって何より重要な気概という点からも、群を抜いていると評価された。京都という土地が、何より進取の気性に満ちていて、実は新しい物好きであり、その時代時代の一番の進取の気性の持ち主がこの街をリードする、という歴史があって、チャレンジングな精神はなにより京都賞に馴染むものだ。そこで最優秀賞はこの建物に与えられることとなった。

〈Lattice—Pod朝田善之助記念館〉もまたチャレンジングな建築だ。しかもさりげない佇まいの中に新しい試みを内蔵している。ひとつは小径の木材を注意深く組み上げて、木造としては大きな空間を包むことに成功している。いまひとつは屋根で集めた熱を地下に送り込み、あらためて全館に行き渡らせて冬の寒さを軽減するという手法を取り入れている。機械的にはただファンのみで、空気をダクトで移動させて熱を輸送し分配する。木造建築の新しいあり方を提示する作品である。そこで〈てらす峰夢〉とあわせ、優秀賞が贈られることとなった。

〈RESIDENCE JO MIBUBANBA〉は佳品である。ただ前3作品に比べて、社会との関わりという点を問われるなら、やや割りを食う嫌いがあった。ただ、私はその空間的な質や、ほとんど廃墟に近かった長屋を再生させつつ、しかもただ機能性、経済性を優先させた改修でなく、あえて柱を露出させ、しかも閉じるところは閉じ、開くところは思い切って開くという建築的な構築性に魅力を感じた。緻密さが全体を貫いていることにも好感を持った。何より、若い建築家のデュオが、もともと縁もゆかりもない京都に拠点を定めつつ、小さな建築に大きな夢をもって挑戦し続けている姿に、その名の通り、奨励賞がふさわしいと思った。

残念ながら受賞に至らなかった候補作も、いずれも意欲的なもので、ディテールや造形に優れた手法やアイディアが豊かに展開されていて好感を持った。ただ建築を取り巻くさまざまな要素の総体に鑑み、チャレンジングな精神の有無も考慮しつつ、最終的に上記の作品が選出されることとなった次第である。

過去を継承するだけが、京都という街の魅力ではない。

一部個人的な書きぶりにはなったが、この結果は審査員すべての議論をふまえたものであり、総意に基づく結果であったことを申し添えておく。

京都外国語大学 新4号館

設計者：小嶋一浩・赤松佳珠子／㈱シーラカンスアンドアソシエイツ

最優秀賞

東側から床に浮かぶアクティビティを一望する

【講評】

建物のそこかしこで、学生がたむろする。好き勝手に場所をとり、何かをしている。自習にいそしむ者がいた。仲間と語りあうグループもいる。教師と相談をしているらしい学生も。いや、横になって仮眠をとっているとおぼしき学生も、いなかったわけではない。

ここには、界隈の賑わいができている。大学の学舎が、その内部が、まるで学生街のようになっていた。この光景に、私は大きな感銘をうけている。こんな校舎がありうるのだと、感心させられた。

私事にわたるが、私は京大の工学部で学生生活をおくっている。修士をおえるまで、六年間を京大ですごしてきた。しかし、大学の建物をこんなふうに活用したことは、まあない。

学生どうしで、打ちあわせをする。そんなおりには、進々堂をはじめとする街の喫茶店へ、足をのばしたものである。あるいは、ひとりで読書にふけりたいときも。けっして、校舎のなかでそういう振舞におよぼうとは、しなかった。

だが、この建物は授業時間外の学生をひきつけている。他の大学でなら、外の学生街へおもむきかねない、滞留させることに成功した。妙な言いかただが、スターバックスあたりと、じゅうぶんはりあえている。とにかく、学生たちに愛されているのである。

建築家たちは、しばしば建物のしかるべき場所を、人びとのつどう空間だと言いつのる。ここに人はあつまると、自作の建築説明で予言したりする。しかし、こういう目論見は、うらぎられやすい。じっさいには、人がよりつかず、伽藍堂のような空間ができただけでおわってしまう。そいうケースを、われわれは、よく目にしてきた。

けっきょく、建築は無力なのかもしれないなと、そういう失敗を見たときに思う。だが、この建物は学生生活の活性化を、大きな貢献をはたしている。建築には力があったんだと、あらためて勇気づけられた。

ヨーロッパの街では、道路や広場にイスやテーブルをだすのが、ふつうになっている。道路を、ただ人や車がゆきかうだけの場所には、してしまわない。人びとが語りあい、いこうスペースとしても利用する。そんな道路活用法が、市街地にはゆきわたっている。

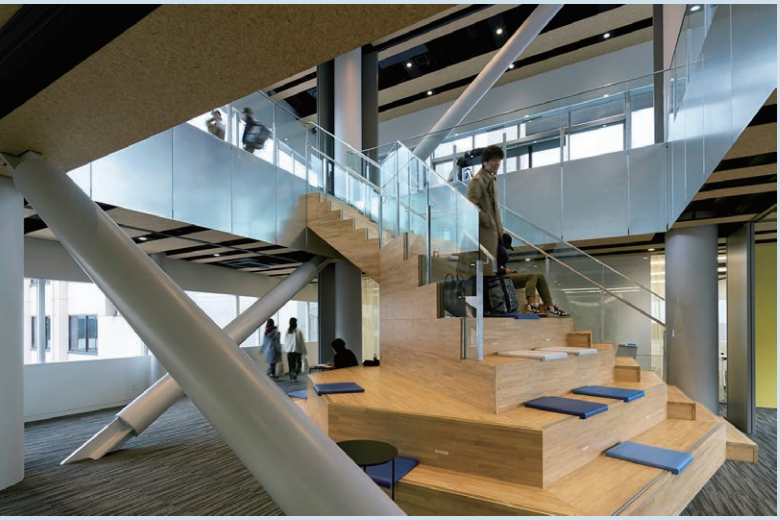
私は、この校舎に、以上のようなヨーロッパ流とひびきあう考えをかいま見る。たとえば、廊下にイスやテーブルがおいてある。休憩のできるしつらいも点在する。廊下が歩行という動きのためだけに特化、あるいは純化されていない。廊下としてはあいまいなところものこしつつ、建物のなかをとおっている。

しかも、東側と西側のオープン・スペースだって、そこからは見わたせる。廊下は広場と接しているかのような気配さえ、ただよわせているのである。

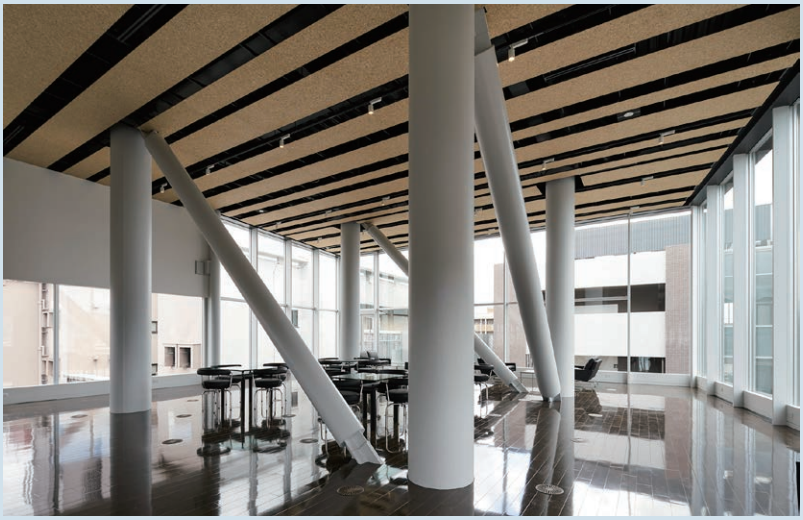
廊下にかぎったことではない。教室も、事務室も、はっきりそれとしてはくぎられなかった。校舎のなかに、とけこむようなあんばいで配置されている。

建築計画としては、アバウトでありすぎるのかもしれない。消防署の人なら、緊急の避難をじゃまだてしかねない廊下のイス類に、難色をしめそうか。しかし、この建物は、そのくだけたたたずまいにこそ、魅力がひそんでいる。意匠のおもしろさがこの活気をささえていることとともに、高く評価したい。

（井上章一）



透明なコアに囲まれた居場所としての大階段



6階南側コア柱とアンボンドブレース

教室階のフレキシブル・ラーニング・エリア

所在地／京都市右京区
用　途／大学
竣　工／2017年6月
敷地面積／18,484.28㎡
建築面積／ 1,035.37㎡
延床面積／ 4,661.26㎡
構造規模／鉄骨造6階建て

撮　影／@DAICHI ANO

ラーニング・コモンズとなる
1階ピロティ空間

Lattice-Pod 朝田善之助記念館

優秀賞

設計者：森田一弥／森田一弥建築設計事務所

所在地／京都市左京区
用　途／資料館
竣　工／2018年4月
敷地面積／236.58㎡
建築面積／ 81.46㎡
延床面積／162.92㎡
構造規模／木造2階建て

【講評】

部落解放運動家の朝田善之助の記念館として人権運動の資料の収蔵と一般の人々への閲覧を目的とした施設である。第一次審査の時からその存在は目を引き、とても楽しみな作品の一つであった。

記念館は路地にひっそりと建っていた。外から見ると窓から特徴的な細い角材の木格子がみえる。「〝社会的弱者の連帯〟によって生まれたという財団法人のアイデンティティを、小さくて弱い木材を寄せ集めた〝格子〟のような軸組を主体構造とすることで、建築的に表現している。」という本人の説明にあるように規格外のため流通せずに余っている安価な9センチ角のヒノキ材を格子に組み合わせ最大スパン5．4mの木造二階建ての構造としている。小さい材の集合体によって力強い構造表現が現れている。そして構造表現がその形態としての美しさをこえて館内に固有の空気感を作り出している。ヒューマンスケールで小気味のよいリズムを持った格子は資料館の中で多く置かれる本棚、本のスケール感であり、その家具のようなヒューマンスケールのリズムが館全体に行き渡っている。格子の一部が棚板のブラケットになり、カウンターを支え、カウンターの仕切りになり、窓枠になり、と構造的役割以上に場所によって様々な形の役割をもっている。

2階に再現された朝田善之助の住まいも、通常であれば唐突に思えるような場所だが、この格子の作り出す大らかなリズムの中にひっそりとはまり込んでみえる。格子のシステムという前提の中にこんな風に様々な要素がはまり込んでいて、それがとても自然なのである。構造が空間を規定しているのではなく、この構造形式の上に自由に場がつくれている。この木材の流通循環の話と同様に設備的にもこの建物の特性を活かした設備循環システムが用いられている。軽い木格子が乗っているのは蓄熱体としての役割をもっている重厚なコンクリートのピットである。冬は屋根面で集熱した暖気を床下に戻し、夏は地下を噴霧して冷却された冷気を床下に通して、コンクリート躯体と土壁となった壁に蓄熱させて安定した室内環境を作り出している。

今回の構造形態に関しては実験しながら工夫を重ねて、木材どうしの接合にはあえてホゾ加工を行わず、構造用長尺ビスを斜めに打ち込むようなシンプルな方法で解決したという。設備システムは今までのプロジェクトを通して実験してきたことを応用したそうだ。建築のありようを根本的に問い直し、新しく組み立てなおしていく設計者の信念と挑戦に感銘をうけた。

（永山祐子）

てらす峰夢

優秀賞

設計者：大垣優太／Ｕ設計室１級建築士事務所

所在地／京丹後市峰山町
用　途／児童福祉施設
竣　工／2018年3月
敷地面積／770.71㎡
建築面積／369.87㎡
延床面積／532.87㎡
構造規模／木造3階建て

【講評】

建築じたいに、さほど強い主張はない。ほどよくまとめられた家屋が、三軒ならんでいる。審査会の初会合で、最初に写真だけを見せられたときは、そんな印象しかいだかなかった。失礼な感想だが、建築賞へのエントリーじたいをいぶかしくうけとめたものである。

だが、説明文を読んでおどろかされた。なんと、この三軒は児童養護施設になっている。親との同居は望めない子どもたちが、肩をよせあいくらしていく。そんな児童たちをまもるための家屋群だと気づき、すっかり見方がかわってしまった。

この三軒は、ひとつの庭をわかちあうかっこうで配置されている。庭とそれぞれの家屋は、垣根や壁などで道路からさえぎられていない。いたって開放的な構えになっていた。

児童養護施設は、閉鎖的にたてられやすい。子どもたちを、管理上の都合だろう、まわりから隔離しがちである。そんな施設なのに、ここは思うぞんぶん、まわりへの門戸をひらいていた。

よくこれを、児童福祉関係当局はうけいれたものだな。関係各方面をときふせるのは、なかなかたいへんだったんじゃあないか。クライアントと建築家に、よほど腰がすわっていないと、こういう仕事はみのらない。

周知のように、東京の南青山では、児童相談所の設置じたいを地域住民がいやがっている。うろんな子どもの出入りする施設をたてるなという声が、あのあたりでは浮上した。にもかかわらず、この施設は地域へ溶け込む構えをしめしている。じっさい、三棟のうちのひとつは、地域との交流棟にもなっていた。

以前は、こちらでも自閉的な施設、門扉もそなわったそれへ、児童を収容していたという。それを新しく開放的なつくりのそれへたてかえるさいには、ハードルもあったらしい。だが、建築家はそれらをひとつひとつのりこえ、今の施設を実現させた。その努力は、多としたい。

以前の施設では、収容児童がそこでくらすことを、級友にかくしたがった。集団下校にさいしても、別の場所で他の子らにわかれをつげ、施設へ帰宅する。そうしてこっそり、かえってくる児童もいたという。

だが、新しい開放的な施設になってからは、事態が一変した。児童たちは、しばしば級友を施設へつれてくるようになったという。児童養護施設らしくない、ふつうの家とみまがうたたずまいに、彼らは勇気づけられた。これこそが自分の家だと、自信をもってまねけるようになったのである。

感動的なエピソードだと言うしかない。建築家の設計が、親元からはなされた子どもたちをはげましている。建築家冥利につきる仕事ではなかろうか。

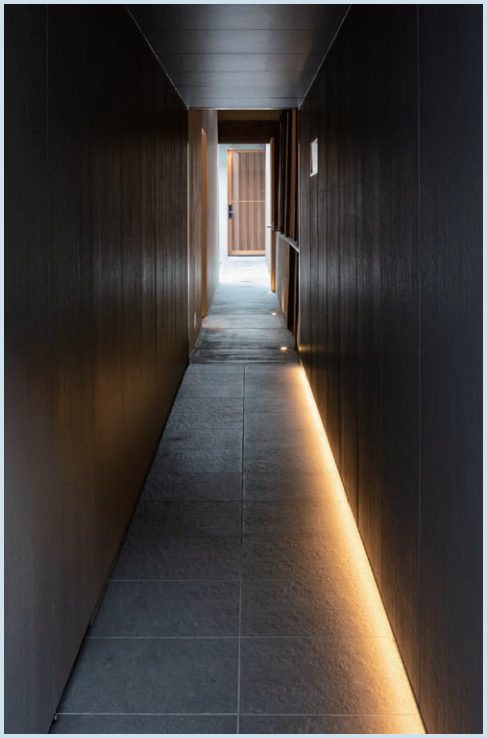
児童福祉施設のありかたを、建築はかえていく可能性がある。建築と建築家には力があることを、ここでも実感した。南青山あたりの住民感情をゆさぶる、ここがそのきっかけになればと思っている。

（井上章一）

RESIDENCE JO MIBUBANBA

奨励賞

設計者：竹内誠一郎・姜　順英／竹内誠一郎建築研究所



所在地／京都市中京区
用　途／宿泊施設
竣　工／2018年8月
敷地面積／87.60㎡
建築面積／70.27㎡
延床面積／99.41㎡
構造規模／木造（伝統軸組工法）
2階建て

【講評】

京都の町家を改装し店舗にしたり、宿泊施設にしたりする例が以前にも増して多くなっている。日本にとどまらずそのブームは世界的なものにもなっていて、特にアジア圏の人々が町家を取得するケースが増えており、町家の価格が上昇していると様々なところから聞いていた。今回の町家のオーナーも日本人ではなくアジアの方と聞いている。彼らの別邸としてつくり、使わないときはゲストハウスとして貸し出す。４万軒あるという老朽化した町家の有効活用のプロトタイプとしての提案とのこと。構造補強の明快な手法とその洗練された空間が目を引き一次審査を通り、現地審査となった。

町家特有の通り庭を抜けると中庭があり離れがある。この通り庭が通常の幅よりかなり細い。この暗いトンネルを抜けていくと異世界につながっているような感覚をおこさせる。中庭を挟んだ手前と奥のそれぞれの棟に老朽化している町家の構造補強のために白い蓋のない箱が挿入されている。手前の箱の玄関を入るとリビング空間にニョキっと屋根裏まで伸びる細くて黒くゴツゴツとした質感を持つ年季の入った柱が並んでいる。これがなんとも脆弱な様子で構造というより彫刻作品のようにみえる。部屋の大きさを広げるために壁を撤去し、そのことにより通り庭が細くなり、箱を挿入した際に柱だけがもとの壁の位置に残されたという〝ズレ〟によって生まれた表現である。この新しい箱と既存躯体の〝ズレ〟による効果は随所にみられる。箱の高さが絶妙な高さで設定されていて、ズレた壁の隙間に間接光が入り上部に広がる古い躯体をほんのり照らし出している。古いものと新しく挿入したもののバランス、随所にきめ細やかな表現が光る。

これから益々増えていくであろう町家の改装の中で、このように質の高い事例があることはこれからの町家保存にとって、とても意義あることであると思った。

（永山祐子）

第7回 京都建築賞 藤井厚二賞 結果発表

主催／一般社団法人 京都府建築士会　後援／京都府・京都市・宇治市

藤井厚二賞は、幾多の実験住宅の計画を通じて卓越した洞察力、探究心、行動力をもとに新しい建築のあり方を追求した藤井厚二氏に敬意を表し、先人の叡智に学び、新たな挑戦をしている建築士の飛躍の一助となることを意図しています。
今回は、多様な意味を持つ「環境」をテーマとして募集しました。

［藤井厚二賞］
house A／shop B　設計者／木村吉成・松本尚子（木村松本建築設計事務所）

［現地審査選出作品］
教養教育共同化施設 稲盛記念会館　設計者／安東 直・木下卓哉・沼田典久（㈱久米設計）
龍谷大学 大宮キャンパス 東黌　設計者／岡田泰典・近藤 努・金井田雄介（㈱日建設計）
天橋立ビューランド・モノレール山麓駅　設計者／半海宏一（半海宏一 建築設計事務所）
法然院の家　設計者／森田一弥（森田一弥建築設計事務所）
house HS　設計者／木村吉成・松本尚子（木村松本建築設計事務所）

［審査委員］
奥谷繁礼（㈱奥谷繁礼建築研究所）
前田圭介（U－D・広島工業大学 教授）
満田衛資（京都工芸繊維大学 教授）

審査に先立ち3人の審査委員で、全体的に完成度の高い建築よりは、環境をテーマに何がしらか挑戦的である建築を評価したいという考えが共有された。また環境の意味について、狭義の温熱環境や地球環境に限定せず、より広義に捉えることが確認された。

3月27日、応募のあった9作品を対象に書類審査を行った。応募作品の中に審査委員の一人が構造設計に関わったものが複数あったため、自らが設計に関わった作品については言及しないこととした。審査委員それぞれが現地審査の対象としたい作品を挙げた結果、予定の5作品より1つ多い6作品を現地審査の対象とした。6作品何れもが実際にその空間を体験したいと強く思うものであった。

5月19日、20日、現地にて対象となる6作品全てを、設計した建築士本人に案内してもらった後、審査を行った。まずは各作品に対して各審査委員が講評を行った。ここでも、審査委員自らが構造設計に関わった作品には言及しないこととした。結果、『house A／shop B』と『法然院の家』を最終候補としたが、ここから1作品を選ぶのに大変議論した。両作品とも本賞に十分に値する建築であったが、あらためて賞の授与は1作品とすることを確認したうえで、「全体的な建築の出来上がりよりも、何かしらより挑戦的な建築を評価したい」という藤井厚二賞の主旨を再確認し、最終的に『house A／shop B』を今年度の藤井厚二賞に選出した。

2019年 藤井厚二賞 講評

奥谷繁礼

【house A／shop B】 京都市の北部に新築された木造の店舗併用住宅。設計するにあたり、一般的な910㎜モデュールを疑い、まずはこの敷地に相応しいモデュールのデザインから始めている。そしてそのモデュールは平面だけでなく断面においても検討されている。それがそのまま木の架構となり、この架構にここでの施主の暮らしに相応しいプランが嵌め込まれていく。モデュールにプランを嵌め込むのは、伝統的な軸組工法から現在に至る木造建築において一般的な設計プロセスとさほど相違ないが、そもそものモデュールの発明により空間はまったく新しいものに感じる。モデュールという形式は、プランの自由さを規定しつつ許容する。そしてこの形式にプランという構造の次元が与えられることにより発現する「house A／shop B」の空間は、秩序と混沌、或いは、自然と作為の同居した多義的で豊かなものであった。それは規定と許容のバランスに依るものであり、そのバランスは形式に依るものであろう。今後、居住者の生活の変化や、或いは、居住者自体の変更があると、この建築は、モデュール（形式）はそのままに、プラン（構造）を更新させることで空間も変容しつつ生き続けていくのではないか。「house A／shop B」における設計手法は、新しく、しかし普遍的で、そして発明的なものである。ここでは周辺環境と建築空間とを媒介するモデュールこそを環境と考えたい。

【house HS】 「house A／shop B」と同じ設計者による、そして似た設計手法による住宅。木の架構（線）に対し選択的に壁や床を嵌める（面）ことによりプランがとても自然にまとめられていた。とても大らかで気持ちのいい空間であり、そしてここには秩序と混沌が同居するような不条理は感じなかった。

【法然院の家】 路地奥の連棟長屋のうちの最奥の1軒の改修。路地を奥に進み玄関を入ると、まるでさらに路地が続くように1階の内部空間がある。その回遊的な内部空間を巡ると、そこここに隠れ処のような心地いい小空間があらわれる。ときには開口部により小さな庭と接続される。それぞれの小空間は内に向かって拡がっていくような性質をもつ。2階は開放的である。中央にダイニングを設け、三方に大きな窓が採られ、部屋の周囲への環境へと空間が拡がっていく。それぞれの開口にはさりげないウィンドウシートが用意されており、そこからは、陵墳と東山の木々や、隣家の庭の木々、甍の連続するルーフスケープといった、固有の世界がさらに拡がっていく。1階2階ともにワンルーム空間でありながら、その空間の性質は対称的である。1階は外から内へと、2階は内から外へと拡がる。この建築を介して、路地から1階そして2階、さらに周囲の環境へと世界が展開されていく。

【龍谷大学 大宮キャンパス 東黌】 新たに建物が配置されることにより生じる西本願寺や大宮キャンパスとの関係性に配慮しつつ、大宮キャンパスにある既存の歴史的建築物群のデザインモチーフを踏襲すると同時に現代的な建築をつくりだそうという試み。どのモチーフをほとんどそのままに転用し、どのモチーフを踏襲しつついかにアレンジするか、とても丁寧に検討されている。既存の北黌、西黌、南黌、本館が四周にファサードをもつことこそが特徴的な建築であると考えるが、この新築された東黌では西側ファサードのみに正面性をもたせるにとどまるのは物足りなく感じる。

【教養教育共同化施設 稲盛記念会館】 直方体の内部に環境に配慮しつつ大学施設として豊かな空間をまとめあげている。ブリーズソレイユのようなファサードを覆うコンクリートのフレームは構造体でもあり、そのプロポーションのよさによりこの建築の佇まいを端正かつ印象的なものとしている。このブリーズソレイユには、温熱環境的な効果のみならず、新たにこのエリアの教育施設をまとめあげる軸線として位置付けられる東側前面の広場と建築の内部との関係を空間的にも調整することを期待した。しかし実際には、内部空間とブリーズソレイユと外部空間との関係が少しちぐはぐとしたものに感じたのが残念であった。

【天橋立ビューランド・モノレール山麓駅】 庇の上部にモノレールがのり、そのモノレールの上部を庇が覆う風景は新しくも地域に馴染んでいるように感じた。一方で内部空間は少し魅力に欠ける。また、道を挟んで反対側にある事務室棟との関係性などにより、この建築がこの地域にあることの意味についてより意識的かつ挑戦的な設計を期待したかった。

前田圭介

講評に先立ち今年度の応募作品全体の印象として、昨年と比べ住宅スケールを越えた作品の応募が増え質の高い建築が多かったこと、そして現地審査に進んだ作品を2日間にかけて審査し市内だけでなく北部の作品も含め京都という地域の広さを身体で感じれる有意義な審査会だった。

今年度6作品の現地審査から藤井厚二賞1点を決めるにあたり絞り込まれた上位二作品「house A / shop B」「法然院の家」に対して審査員同士の深い議論が最後まで交わされたことに触れておきたい。議論の中で度々テーマである「環境」という言葉に対する幅広い視野から賞のタイトルでもある藤井厚二の考えを捉え直し、両作品の中に合致する点を鑑みたりしながら審査の末、最終的に今年度の藤井厚二賞は木村松本建築設計事務所が手がけた「house A / shop B」に決定した。

まず「house A / shop B」は書類審査時では、低層部がショップとはいえ全面ガラスで雑多な状態が直接的に街に対して溢れ、正面の不均一なサッシ形状や塔屋のような居住空間など、グリッドの厳格な構造形式に対して与件を満たす余剰と言えど住宅やショップとしてどこか不自由さに繋がっているのではないか、という印象をもったのだが、実際に敷地周辺の環境に触れながら内部空間を訪れてみると、それはまったくの杞憂だった。

敷地向いのバイクショップや隣家含めて周辺の時間を経た街並みの中に妙に馴染んでおり、あたかも以前からあった住宅を一度スケルトンにして構成し直した佇まいに感じられた。この敷地における大らかな構造体を軸に、与件が詰まっていく状態がそう感じさせたように思う。

道路に面してプロダクトデザイナーであり販売をするご主人と、その奥では手作り菓子を提供するカフェを営む奥様が所狭しとものに囲まれながら、審査そっちのけで淡々と働いている日常の豊かな姿が印象深かった。

この全体の構造形式から成る建築はこの先、仕事場と住居のどちらかの機能が時期に応じて流動的に広がっていくことがあっても、その都度建て主の想像を膨らませ変化し包含していく未完の器のように見えた。審査帰り際、設計者から将来北面の土地へ増床していく可能性がある話を聞きながら、シンメトリーのバシリカのような完成形を想像したが、現在の2分割したような未完の形態こそがこの地域に馴染んでいるように感じた。近い将来の増築によって全体をつくり全部が集まったとき、どのような状態になるのかを想像することで、よりこの建築の魅力が増した。

つぎに森田一弥氏が手掛けた「法然院の家」は100年近い長屋の持つ時間を継承しながら周辺環境を上手く読み取り上階の団欒の場と下階のプライバシーの場だけでなく、いくつかの魅力的な居場所とその繋ぎ方が印象的だった。それは2階の窓辺の家具と一体化した場所やDENのような玄関付近の場からサンルームへと家族の本棚で繋いだりと好きな本を好きな居場所で気の向くまま読んだり、寛いだりできるからである。（実際、審査時に子供が静かなサンルームでひとり楽しそうに寛いでいた・・・）プラン上に室名をつけることで一定機能の領域を規定しまうものだが、「法然院の家」では室名と関係なく家族にとってそれぞれ特性をもった等価な居場所があるように感じた。そして居間からつながるバルコニーの取り方がとても気持ちよかった。三軒長屋であるにも関わらず隣地の距離感と周辺環境との間合いなどが適度なプライバシーを確保しつつ開かれているがゆえ風が通り抜ける。

建築全体において設計者が大切にしている時間に対して材料の扱い方や建築を構成していくプロセスを表出させることによって、限りなく人とモノの距離が近い空間だった。

最後に藤井厚二賞という建築家の名を冠した審査にあたりあらためて藤井厚二の思考を自分なりに捉え現代の建築を評価していく難しさと愉しさ、そして多くの学びがあった。

今後さらに応募側、審査側が藤井厚二賞を時代に即して考えていくことが過去から未来へと建築を通してつながることになるだろう。

満田衛資

今回の審査は、私自身がかつて構造設計者として関わった建物が数多くエントリーされていたため、昨年度とは違う難しさがあった。自分の関わった作品には投票しないという審査の原則を貫くと、それら作品は最大で2票までしか得票できなくなり本来不利となるのだが、私以外の審査員が二人ともが是とするものが多く、結局のところ現地審査に進む6作品のうち、3作品が私の関与した建物となった。

ここでは現地審査に進んだ6作品のうち私が構造設計に関与した作品を除く残りの3作品について講評してみたい。

【天橋立ビューランド】 既存躯体を活かし、営業を続けながら改修をすることは決して容易ではないし、その道筋を施工者任せにするのではなく設計者がコンペ時から提案していた点を評価し現地審査に臨んだ。

景観に配慮した瓦を載せた勾配屋根の片持ちケラバの直下に傾斜モノレールの車体が入線する様は小気味よかったし、また、モノレールの支柱などの触れることのできない既存構築物を上手く交わしながら、通路屋根などを新たに設ける等の難しい計画には構造設計者の力量を感じる点も多かった。しかしながら、決して記憶に残るような既存躯体フレームだったわけでもなく、かえって工事の難易度を高めてしまうような既存躯体の再利用にどの程度の必然性があったのか、という疑問の方が強く残った。注目していた点がかえってマイナスに響いてしまった現地審査であった。

【龍谷大学 大宮キャンパス 東黌】 ひと言でいうと、上手にまとめられた建物である。関与した作品に投票できない私にとっては3作品の中では本作品が一番であった。

テーマである環境をキャンパス環境と捉え直し、重要文化財を含む同キャンパス内の周囲の擬洋風建築群との調和を図ることにも成功している。腕の良い職人が施工チームに加わるよう仕向けるなど組織としての力量の高さも伝わってきた。単純な再現とせず、似せつつも現代らしさを出すといった工夫もしており、減点の少ない作品と言えよう。

ただ、やはり北黌・南黌の存在感には遠く及ばず、この建物が無くとも生きながらえる北黌・南黌に対し、逆にそれらの存在無しには成立しないという意味で、上手く寄せた、という域に留まることを受け入れてしまった建物なのだと思う。

【教養講義共同化施設 稲盛記念会館】 環境というテーマを掲げた今回、一次審査資料において、いわゆる環境性能についてのアピールが最も強い作品であった。構造躯体でもあるプレキャストコンクリートを積極的に表しで用いている点も構造エンジニアとして関心があり楽しみに現地審査に臨んだが、全体的に〝個別解の集合体〟という印象が残った。

細いPC列柱の間は半分が壁で埋められてしまっており、環境装置であるエコボイドも（春先だったからかもしれないが）空気が流れている効果は感じにくく、よく見かけるトップライト下の吹抜けという印象しか残らなかった。連続するスレンダーなPC列柱と先端の薄い大庇による外観には迫力と共に端正な美意識を感じることもできたが、内部は冗長な中廊下の校舎という印象が強く、統合のダイナミズムを感じることのできなかった点が残念であった。

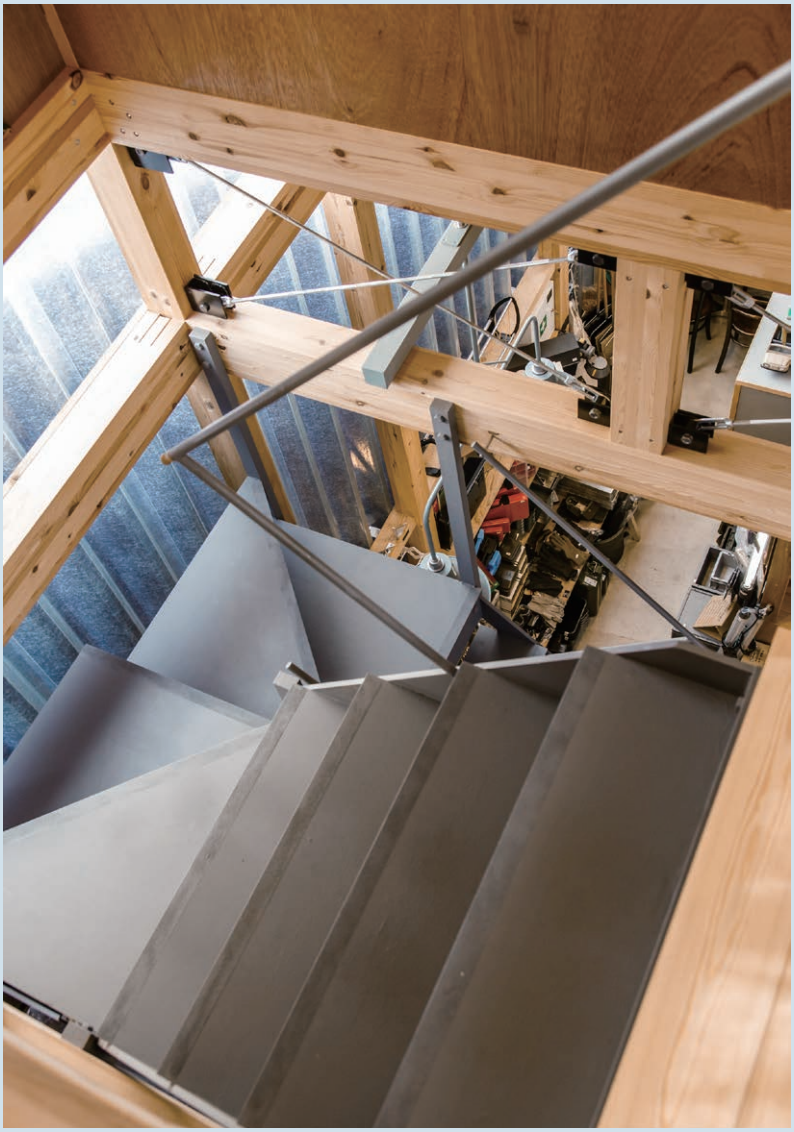
藤井厚二賞

house A / shop B

設計者：木村吉成・松本尚子／木村松本建築設計事務所

所在地／京都市北区
用　途／住居兼店舗兼工房
竣　工／2016年9月
敷地面積／ 71.48㎡
建築面積／ 50.02㎡
延床面積／102.35㎡
構造規模／木造
　　地上2階建

撮影／大竹央祐



中央部の偏平断面の片持ち柱にトラス梁と半剛接梁を接合した両側ト型ラーメン構造。
全て既成金物で構成することにより、壁のない魅力ある空間をローコストで実現。

現地審査選出作品

教養教育共同化施設
稲盛記念会館

設計者：安東　直・木下卓哉・沼田典久／㈱久米設計

所在地／京都市左京区
用　途／大学
竣　工／2014年6月
敷地面積／117,023.86㎡
建築面積／　3,811.04㎡
延床面積／　9,088.74㎡
構造規模／RC造
　　地上3階建

龍谷大学
大宮キャンパス 東黌

設計者：岡田泰典・近藤　努・金井田雄介
　　／㈱日建設計

所在地／京都市下京区
用　途／大学
竣　工／2018年2月
敷地面積／2,859.27㎡
建築面積／ 1,719.06㎡
延床面積／4,196.02㎡
構造規模／RC造・S造・SRC造
　　地上3階建

第７回 京都建築賞　藤井厚二賞

天橋立ビューランド・モノレール山麓駅

設計者：半海宏一／半海宏一建築設計事務所

所在地／宮津市
用　途／モノライダー駅舎
竣　工／2018年4月
敷地面積／603.74㎡
建築面積／163.69㎡
延床面積／266.94㎡
構造規模／鉄骨造
　　地上2階・地下1階建

法然院の家

設計者：森田一弥／森田一弥建築設計事務所

所在地／京都市左京区
用　途／専用住宅
竣　工／2016年4月
敷地面積／ 103.19㎡
建築面積／　56.86㎡
延床面積／104.57㎡
構造規模／木造
　　地上2階建

house HS

設計者：木村吉成・松本尚子
／木村松本建築設計事務所

所在地／京都市中京区
用　途／住居
竣　工／2018年3月
敷地面積／272.50㎡
建築面積／　84.40㎡
延床面積／144.60㎡
構造規模／木造
　　地上2階建